

ほくごんかまあと

北山窯跡 (本発掘調査B)

所在地 瀬戸市落合町地内
(北緯35度15分8秒 東経137度7分36秒)

調査理由 緊急急傾斜地崩壊対策事業

調査期間 平成29年5月

調査面積 100㎡

担当者 酒井俊彦・武部真木



調査地点 (1/2.5万「多治見・猿投山」)

調査の経過 調査は緊急急傾斜地崩壊対策事業に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。これまでに北山窯跡の主要部分と勘助窯跡については(公財)瀬戸市文化振興財団によって平成27年度に発掘調査および工事中の立会調査が行われている(市調査)。今回は北山窯跡北縁の隣接地100㎡について発掘調査を行った。

立地と環境 遺跡の立地する丘陵地は水野川と支流の鳥原川との合流点付近、水野川右岸の北部山地にあたり、南東側にかけて広がる品野盆地を望むこの山稜付近には戦国期の城館跡(落合城跡)の存在が推定されている。調査地点の標高は171mであり、一般国道248号北西側に近接して周辺は住宅地となっている。すぐ背後の標高174~176mの南向き斜面上に勘助窯跡があり、市調査により窯体2基(1号窯、2号窯)の位置と灰原が確認されている。出土遺物は大窯第1段階後半から第3段階に属するものがあり、操業期間は16世紀初頭から中葉あたりに位置づけられる。また、勘助窯跡の灰原等を造成して北山窯が築かれたことも明らかとなった。

調査の概要 北山窯跡は調査以前に、位置と近代から戦前まで操業した連房式登窯であることが知られていた。市調査により窯体では焼成室の一部とコクド・煙道・煙突が検出されたほか、窯体周囲の西側・北側・東側にはそれぞれ作業場と考えられる平坦面が、西側と東側には加えて石垣がみられた。さらに東側では通路(階段)と区画溝が確認されている。

今回の調査地点では、窯体の東側の平坦面とこれにつながる通路(階段)、石垣などの延長部分を確認した。調査区北端部は最大で厚さ1.2mに達する大量の板トチからなる物原層で覆われ、その一部が東側の平坦面にまで及んでいた。可能な範囲内でこれを除去したところ、平坦面の境界を不整形な凹みとして認識できた。平坦面の規模は検出範囲で4×3m、3個の礎石列とピット1基がみつき、小規模ながらも建物の存在が想定される。出土遺物は陶器の植木鉢、磁器の染付飯茶碗・湯呑・皿のほか、白色製品の焼成不良品が含まれる。匣鉢やエブタ、高台の歪みを防ぐ磁器製円柱形の窯道具などがある。なお、平坦面を造成した整地層にはここでも大窯期の播鉢、天目茶碗陶片、窯道具が含まれており、破碎された小片が確認できた。

まとめ 聞き取り調査により北山窯跡の操業開始は明治35年に遡り、最終段階には戦前まで稼働していたことがわかっている。発掘調査の期間中には、当時の風景を記憶し、あるいは実際の作業に関わった体験をもつ複数の見学者から話を伺うことができた。埋蔵文化財として取り扱う場合にも近代の変化はめまぐるしく、時代を映す重要な情報が含まれていると考えられるが、既に詳細が復元できない事柄も少なくない。

(武部真木)



調査地点の堆積層断面（南から 上部が物原層）



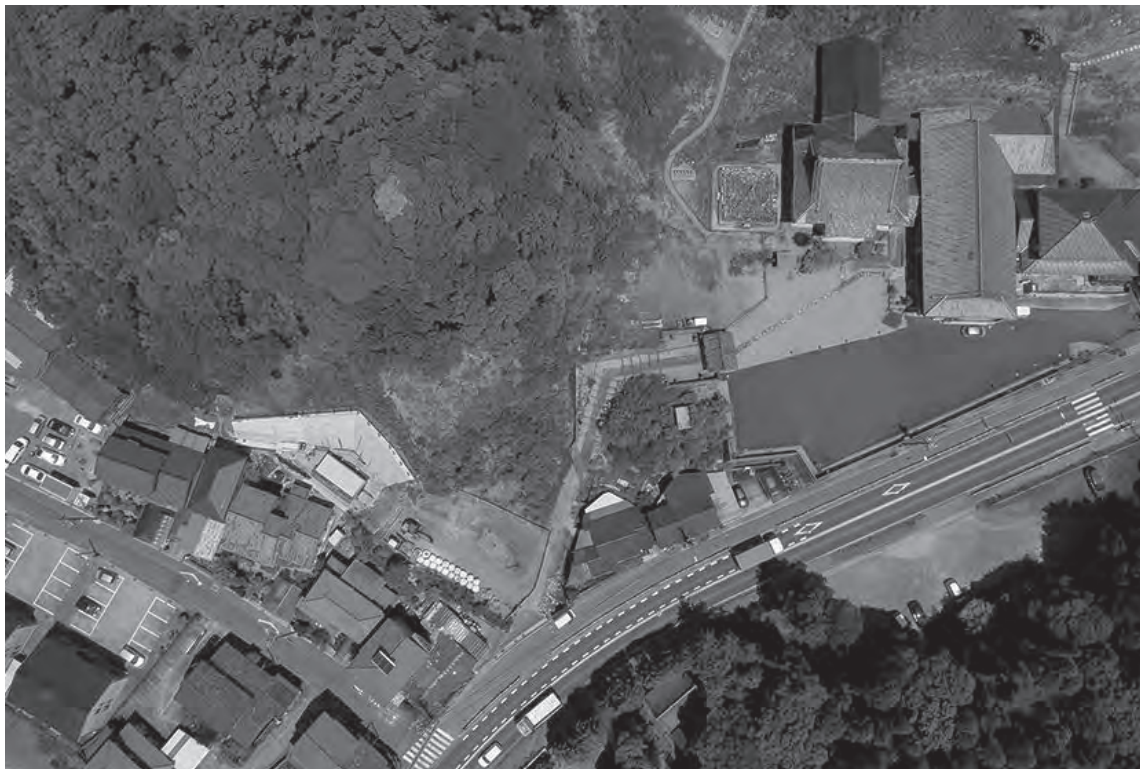
平坦面と礎石列（南西から）



調査地点全景（東から）



階段・石垣部分（東から）



遺跡全景（画像上が北）
中央下寄りが北山窯調査地点、勸助窯跡は丘陵部斜面、調査区右手は久雲寺境内